

「ほめ」への返答に関する副次文化的比較：

対人関係別、性別、世代間

小池浩子

文化の異なる人同士が円滑にコミュニケーションを営むためにはお互いに相手の文化を理解するとともに自文化の認識を持つことは重要である。文化の特徴はその構成する人々の平均像や最も多くの人を持つ特徴によって代表して表現されるが、一文化内部の副次文化（国境で区分されるような包括的文化の内部に存在する細分化された集団やカテゴリー。例えば民族、職業、性別、年齢など。サブカルチャーとも言う）(Gudykunst & Kim, 1987)による違いを知ることもまた大切である。また、「日本人の対人関係とコミュニケーションの関係を考えて場合、前者が後者を規定するという傾向が強い。極端に言うならばまず対人関係があってコミュニケーション関係はそれに従属している」（北出、1993、P.39）とも言われるように、日本文化を研究するに当たっては対人関係という側面を見逃すことができないのである。

文化は非常に多様かつ複雑な面から成り立つが、相互交流について考えるに当たって大切なことがらの1つはコミュニケーションスタイルである。相互交流の際に用いられる言葉の運用法は文化によって異なるのである。なかでもほめられた時の返答の仕方は日本文化の特徴が表出しやすいところであると考えられる。例えば、英語との比較研究では、ほめを受け入れる返答は英語の方が1.5から3倍多く、否定するような返答は日本語の方が2.5倍程多いと言う（横田、1986；寺尾、1996）。また、日本への留学生はほめられたときにどのように返答すべきか戸惑うことが多いという（徳井、2000）。

そこで本研究では、日本文化におけるほめ言葉への返答スタイルに焦点を絞り、その副次文化的差異を探ることにする。

日本語のほめ言葉への返答に関する研究

ほめ言葉への返答スタイルに関しては、かねてから言語学やコミュニケーション学の分野で研究が行われてきた。これに関するこれまでの研究では、どのようなことが明らかになり、また副次文化的差異はどのように取り扱われてきたのだろうか。

バーンランドとアラキ (Barnlund & Araki, 1985) は日本人とアメリカ人のほめる行為とその返答についての比較調査を行った。この研究は予備調査的なインタビュー調査と本調査としての質問紙調査の2段階で行われた。インタビュー調査は日本とアメリカ在住の日本人及びアメリカ人に対して行われ、それぞれの文化でのほめる行為の出現頻度やほめる内容、ほめの方法、ほめる相手の特定、そしてほめへの反応について概略を知ることが目的であった。本調査では予備調査で明らかになったほめの方法が、相手や内容毎に両文化でどの程度用いられるかが調べられた。このうち本研究に関係が深いのは予備的インタビュー調査の中

で調べられたほめへの反応についてである。調査時点で最も最近生じたほめとその返答に関する言語活動を思い返して報告してもらおう方法を取った。その結果を見ると、アメリカ人はほめられたことをそのまま受け入れるケースが最も多く（58%）、説明を加えるなどしてその話を続けるケースが次に多かった（19%）。これに対して日本在住の日本人はほめたことの正当性に疑問を投げかけるケースが最も多く（33%）、次いで笑ったり何も言わないケース（25%）、否定する（19%）、ほめられるに値しないことを説明する（17%）と続いたという。

横田（1986）は、本人と家族がほめられたときの返答スタイルについて日本語とアメリカ英語で比較調査を実施した。ほめられる状況を提示して、どのように返答するか質問紙に記入してもらおう方法を取った。回答に寄せられた「返答」を a.肯定、b.回避、c.否定の3つに分類し、日本人とアメリカ人を比較すると、アメリカ人は格段に肯定的返答を多く用い（68%）、回避をする人もある程度いる（24%）ものの、否定はあまりしない（8%）のに対し、日本人は回避が最も多く（59%）、否定もアメリカ人に比べてかなり多く用い（20%）、肯定はアメリカ人の3分の1程度（21%）であった。ただ、この調査の対象となった日本人はアメリカ在住者でありアメリカ文化の影響を受けている可能性があることは考慮に入れる必要があろう。本人がほめられた場合と家族がほめられた場合で比較すると、興味深い結果が得られた。アメリカ人は自分よりも家族をほめられた場合の方が肯定的返答が少し多くなったのに対し（65%：70%）、日本人では逆に少なくなっていた（26%：16%）。日本人は、回避的反応も本人より家族がほめられたときの方が多かった（54%：66%）。家族がほめられたときに回避や否定するのは日本人男性に特に多く見られたと言う。また横田は、多くの人が、肯定、否定、回避の発言の後に説明調の付加文を続けていることに着目し、（日本人の場合は87.3%、アメリカ人は75.3%）別途分類している。

ちなみに横田の調査では日本語を話す日本人と英語を話すアメリカ人の他に、日本語を学び話すアメリカ人というグループも調査対象に加え、社会言語的転移の程度（外国語を話すときの母語のスタイルの影響）をも調べているが、母語の影響よりも、学習言語（この場合日本語）のスタイルを過剰に用いる結果が報告されている。

また、寺尾（1996）は、日本人のほめ言葉への返答スタイルの調査を、テレビのトーク番組と日常生活の会話の両方から1,000件近いデータを収集して行った。寺尾は英語を対象とした先行研究をもとに返答スタイルを以下のように分類し、その出現頻度を調べたのである。分類方法と結果は以下のように報告されている。a.受け入れ（計30.4%）：a-1.賛同の発言（13.0%）、a-2.感謝・喜び（9.4%）、a-3.控えめな同意・微笑み（6.9%）、a-4.ほめ返し（1.1%）。b.打ち消し（計25.5%）：b-1.不賛成の発言・しぐさ及び自分に不利な情報の提示（21.6%）、b-2.的確さへの疑問（そうかなあ等、3.0%）b-3.ほめの意図への疑い（0.9%）。c.その他（計44.1%）：c-1.シフト（他人のおかげとする等、1.4%）、c-2.情報的コメント（11.9%）、c-3.無視・話を逸らす（7.2%）、c-4.会話の流れで話題がそれる（7.7%）、c-5.ほめ言葉の内容の確認（7.8%）、c-6.冗談・おどけ・照れ（8.1%）。このように、その他の範疇に入れられた返答が最も多く、次いで受け入れ、打消しの順であったが、同時に分散

が大きいかもわかる。ちなみに寺尾は、返答が単独で出現したときのみを分析の対象としており、複合で現れたケースは分析からはずしているところが少々気になる。

これら3つの先行研究は、それぞれ分類のし方が少しづつ異なり、大まかな分類を参考に比較することは難しい。そこで、各研究の下位分類を参考に(バーンランドとアラキには下位分類の報告なし)可能な限り類似していると思われる項を比較してみると表1のようなになる。なお、バーンランドとアラキの結果には報告されていないところがあるが、これは順位の高い項目のみ報告したためと思われる。

表1 日本人のほめ言葉への返答に関する先行研究の概略結果

	バーンランド & アラキ (1) 日本の日本人	バーンランド & アラキ (2) 在米日本人	横田 (在米日本人)	寺尾 (日本の日本人)
肯定	—	25%	21%	30.4%
否定	19%	—	20%	21.6%
説明	17% (否定的なもの)	—	(別途分類。説明のみは0%?)	11.9%
疑問	33%	20%	59% (疑問と回避 は分類上一緒)	3.9%
回避	25%	22%	—	24.6%
その他	—	—	—	7.8% (確認)

これらの調査から、日本人がほめられたときの返答のスタイルの特徴を垣間見ることができる。例えば、日本人のその返答のうち20%から30%程度がほめ言葉を肯定するものであること、20%程度が否定するものであることなどである。ちなみに否定については、寺尾(1996)も述べているように、英語と比較すると出現率が明らかに多いものの、一般に言われているほどは高くないようである。

問題設定

このように、これまでの研究は大まかな特徴を示唆してくれてはいるものの、まだ日本人のほめに対する返答スタイルについて全体像が明らかになったとは言えない。課題の1つは世代間の違いについてである。変動の大きな社会にあっては同一文化内でも、世代によってコミュニケーションスタイルが大きく異なることは容易に推察できる。また、ホフステード(1986)の世界的規模の調査によって、日本文化は世界に類を見ない男性性の強い文化であることがわかっており—男性的価値観(頑張り、達成、上昇志向などが強く、社会福祉的な価値観が薄い)、男女間の役割意識の隔たりが大きい、男女の文化差も大きい—、これが男女のコミュニケーションスタイルにも関係する可能性は高い。したがって男女の返答スタイルの比較をすることも大切であろう。世代や性別など副次文化(サブカルチャー)的差異を把握することは、われわれの自文化認識の幅を広げることにもつながるし、異文化出身者が日本文化について学ぶ際にも役立つと言えよう。また、日本文化は対人関係によって表現スタイルが大きく異なることが知られておるため、対人関係による比較も必要であろう。そこで本研究ではほめ言葉への返答における世代間と性別の比較を中心に行うことにした。

これまでの研究で不備が指摘される点がいくつかある。本研究では、それらをも考慮に入れて進めていくことにする。例えばバーンランドとアラキ(1985)と横田(1986)の研究は、ともに調査方法と調査対象人数に関して問題を含んでいる。これらは自分が最近ほめられたときにどのように返答したのか思い返して報告してもらう形式を取ったり、提示されたエピソードに対し自分ならどのように返答するか考えてもらう方法を用いた。そのため、現実の発話とは違いがある可能性が否めない。また、両者とも、調査対象者数が 20 名以下とかなり限られており、サンプル数としては十分とは言えない。

寺尾(1996)の調査は現実の発話を分析しており、サンプル数的にも十分であるが、寺尾自らも指摘しているように、テレビのトーク番組内の会話については、視聴者を意識したり「テレビ文化」を反映したものであり、日常会話と一緒に分析して良いかどうか疑問が残る。また、前述のように、返答が単独で出現したときのみを分析の対象としており、もし複合で現れたケースも含めて分析したならば、異なる結果を得たかもしれない。

返答スタイルの分類方法については、寺尾がかなり詳細なカテゴリーを用いているものの、本人も指摘している通り、英語の先行研究の分類をもとに分類基準を作成しており、今後は日本語に見合った分類法が必要であろう。予めカテゴリーを作成して分析に入るよりも、データを見つめて分類するといった分析手法が有効と思われる。本研究では、これらの課題を考慮し、a.現実の会話からデータを収集すること、b.十分なサンプル数を確保すること、c.収集したデータをもとに独自の分類を試みることの3点を重視して調査を行うこととした。

研究方法

調査方法

調査協力者が他者をほめ、そのときの相手の反応を収集した。調査協力者は関東地方の4年制私立大学と短期大学のコミュニケーション関連科目を受講している学生32人である。調査協力者は目的や方法をよく理解した上でひとり当たり10人ほどに対してほめる行為を実施した。実験ではあるが、相手に対しては研究目的は述べずに日常生活の中でできるだけ自然にほめことばを投げかけるようにした。収集したデータは、相手との間柄、性別、年齢、ほめた内容、場所、相手の反応、特記事項である。調査協力者がこれらについて事前に用意された調査票に記入した。このうち相手の反応については、可能な限り現実の会話を記述し、必要に応じてニュアンスや非言語行動も記述してもらった。

調査対象者

通常の、ごく自然なコミュニケーション行動の中での反応を知るため、日ごろから相互作用のある関係を対象とした。したがって調査対象者は調査協力者の知人、友人、家族などの326人である。年齢は3歳から75歳であるが、10歳以下は分析対象からはずした。10代95人、20代164人、30代16人、40代23人、50代13人、60以上12人という構成である。

分析方法

まず、ほめことばに対する反応を内容分析した。反応については調査票では具体的なやり取りのことばがそのまま報告されているので、それをコード分類した。言葉のやり取りだ

けでは分かりにくい非言語的反応についても記述してもらい、補足的に分類に用いた。大分類は肯定、否定、中立の3項目に分け、それぞれ反応の言葉と様子を吟味して下位分類を行った。複数のカテゴリーに渡って反応を述べている場合は、複数回答として扱った。例えば、「ありがとう。でも安物よ」という返答を分析する場合は、肯定的反応と否定・謙遜の両方に分類されるのである。コード分類の後、世代別、性別、そして人間関係別に集計し、比較した。

結果

カテゴリーは以下のように分類された。否定的反応：(NG1)否定・謙遜(例：「そんなことないよ」「そんな、たいしたことないですよ」など)、(NG2)怒る。肯定的反応：(P1)礼を言う、(P2)得意げ、(P3)肯定的説明(例：「そうなんだ。これは…」)、(P4)肯定的確認(例：「(うれしそうに) そう?」、(P5)照れる、(P6)ほめ返す。中立的反応：(NT1)普通のことである、(NT2)単に説明する、(NT3)何も言わない、(NT4)半信半疑(例：「(疑わしそうに) 本当?」、(NT5)ほめへの疑問(例：「何でほめるの?」)、そして「その他」である。

分析の結果は表2の通りである。全体としては、否定的反応のうち、「否定・謙遜」(NG1)は25.4%、「怒る」(NG2)は1.2%；肯定的反応のうち「礼を言う」は15.2%、「得意げな反応」は11.5%、「肯定的説明」17.0%、「肯定的確認」は11.8%、「照れる」が7.7%、「ほめ返す」が1.2%；中立的反応のうち「普通のことだ」というのは3.1%、「単に説明する」は6.8%、「何も言わない」人は0.9%、「半信半疑」の反応は8.7%、「ほめへの疑問」が2.2%、その他は3.7%であった。このように、一番多い反応はほめられた内容を否定し、謙遜を示すもので、2番目が肯定的に説明をするもの、3番目が礼を言うことであった。

世代別の比較は以下の通りである。「否定・謙遜の反応」は30代が最も多く43.8%、次いで10代が25.3%、60歳以上：25.0%、20代：24.4%、50代：23.1%、40代：21.7%の順であった。「怒る」という反応をした人は、20代：1.8%、10代：1.1%、30代以上：0%であった。「礼を言う」人は30代が最も多く25.0%、10代：16.8%、50代：15.4%、20代：15.2%、40代：8.7%、60歳以上：0%であった。「得意げな反応」は60歳以上が最も多く16.7%、次いで50代が15.4%、10代：12.6%、20代：11.0%、40代：8.7%、30代は最小で6.3%であった。「肯定的説明」は60歳以上：25.0%、50代：23.1%、40代：21.7%、10代：16.8%、20代：16.5%、30代：6.3%、の順であった。「肯定的確認」は60歳以上が最も多く25.0%、以下は40代：17.4%、10代：15.8%、20代：8.5%、50代：7.7%、30代：6.3%であった。

「照れる」反応を示したのは10代：10.5%、20代：8.5%、50代：7.7%で、30代、40代、60歳以上は0%であった。「ほめ返し」をしたのは50代：7.7%、30代：6.3%、10代：1.1%、20代：0.6%、で40代と60歳以上は0%であった。「普通のことと言う」反応は40代：8.7%、10代：4.2%、20代：2.4%、他は皆無であった。「単に説明をした」のは60歳以上：8.3%、20代：7.9%、10代：7.4%、30代：6.3%、で、30、40代は0%であった。「何も言わない」という反応は、60歳以上が8.3%、10代が2.1%で、他は皆無であった。半信半疑の反応は、

60歳以上：16.7%、10代と30代が6.3%、40代：4.3%、20代：11.0%、50代：0%であった。なぜほめるのか相手に質問したのは、10代と30代に各6.3%見られたのみであった。

表2 ほめへの反応の副次文化比較

集団 反応	全体 n	世代						学生/社会人		性別		対人関係			
		10代	20代	30代	40代	50代	60~	22以下	23以上	男性	女性	家族	友人	仕事	他
全反応	323	95	164	16	23	13	12	211	112	112	211	53	173	42	55
NG1 否定・ 謙遜	82	24	40	7	5	3	3	48	34	22	60	6	35	21	20
	25.4	25.3%	24.4%	43.8	21.7%	23.1%	25.0%	22.7%	30.4%	19.6	28.4	11.3	20.2	50.0	36.4
NG2 怒る	4	1	3	0	0	0	0	4	0	3	1	0	1	0	3
	1.2	1.1%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	2.7%	0.5%	0.0%	0.6%	0.0%	5.5%
P1 礼を言う	49	16	25	4	2	2	0	35	14	8	41	2	32	8	7
	15.2	16.8%	15.2%	25.0	8.7%	15.4%	0.0%	16.6%	12.5%	7.1%	19.4	3.8%	18.5	19.0	12.7
P2 得意げ	37	12	18	1	2	2	2	26	11	22	15	11	19	3	4
	11.5	12.6%	11.0%	6.3%	8.7%	15.4%	16.7%	12.3%	9.8%	19.6	7.1%	20.8	11.0	7.1%	7.3%
P3 肯定説明	55	16	27	1	5	3	3	35	20	16	39	15	28	8	4
	17.0	16.8%	16.5%	6.3%	21.7%	23.1%	25.0%	16.6%	17.9%	14.3	18.5	28.3	16.2	19.0	7.3%
P4 肯定的確認	38	15	14	1	4	1	3	23	13	11	27	8	22	3	5
	11.8	15.8%	8.5%	6.3%	17.4%	7.7%	25.0%	10.9%	11.6%	9.8%	12.8	15.1	12.7	7.1%	9.1%
P5 照れる	25	10	14	0	0	1	0	19	6	12	13	2	14	2	7
	7.7	10.5%	8.5%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	9.0%	5.4%	10.7	6.2%	3.8%	8.1%	4.8%	12.7
P6 ほめ返す	4	1	1	1	0	1	0	2	2	1	3	0	2	1	1
	1.2	1.1%	0.6%	6.3%	0.0%	7.7%	0.0%	0.9%	1.8%	0.9%	1.4%	0.0%	1.2%	2.4%	1.8%
NT1 普通のこと	10	4	4	0	2	0	0	8	2	5	5	4	5	1	0
	3.1	4.2%	2.4%	0.0%	8.7%	0.0%	0.0%	3.8%	1.8%	4.5%	2.4%	7.5%	2.9%	2.4%	0.0%
NT2 単説明	22	7	13	1	0	0	1	20	2	10	12	2	17	2	1
	6.8	7.4%	7.9%	6.3%	0.0%	0.0%	8.3%	9.5%	1.8%	8.9%	5.7%	3.8%	9.8%	4.8%	1.8%
NT3 何も言わない	3	2	0	0	0	0	1	2	1	0	3	2	1	0	0
	0.9	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.9%	0.9%	0.0%	1.4%	3.8%	0.6%	0.0%	0.0%
NT4 半信半疑	28	6	18	1	1	0	2	15	13	11	17	4	16	4	4
	8.7	6.3%	11.0%	6.3%	4.3%	0.0%	16.7%	7.1%	11.6%	9.8%	8.1%	7.5%	9.2%	9.5%	7.3%
NT5 ほめへの 疑問	7	6	0	1	0	0	0	4	3	3	4	1	5	1	0
	2.2	6.3%	0.0%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	2.7%	2.7%	1.9%	1.9%	2.9%	2.4%	0.0%
その他	12	1	7	1	2	1	0	6	6	4	8	3	6	0	3
	3.7	1.1%	4.3%	6.3%	8.7%	7.7%	0.0%	2.8%	5.4%	3.6%	3.8%	5.7%	3.5%	0.0%	5.5%

10歳単位の世代間比較に加えて22歳以下とそれ以上で比較すると、「否定・謙遜」は22以下が22.7%、23以上が30.4%で、ある程度の違いが見られた。また、「単に説明する」反応は22以下が9.5%、23以上が1.8%で、違いが見られた。これ以外の項目では5ポイント以上の開きは見られず、明確な違いは発見されなかった。

性別の比較では、「否定・謙遜」（女性：28.4%、男性：19.6%）、「礼を言う」（女性 19.4%、男性は 7.1%）、「得意げ」（女性 7.1%、男性 19.6%）の 3 項目にはっきりとした違いが確認された。この他、「照れる」反応にある程度の違いがあることがわかった（女性 6.2%、男性 10.7%）。

対人関係別の比較では以下の 4 項目に際立った違いが見つかった。否定・謙遜は仕事関係で際立って多く用いられており（50.0%）、次いで友人：20.2%、家族：11.3%の順であった。「礼を言う」のは、仕事関係が 19.0%、友人は 18.5%と近似しているが、家族間では 3.8%と極端に少なかった。「得意げ」は家族間で 20.8%と際立って多く用いられ、友人は 11.0%、仕事関係は 7.1%であった。「肯定的説明」についても家族間で 28.3%と最も多く使用されており、次いで仕事関係の人の場合が 19.0%、友人が 16.2%であった。この他、肯定的確認（家族：15.1%、友人：12.7%、仕事関係：7.1%）と「普通のことと言う」（家族：7.5%、友人：2.9%、仕事関係：2.4%）、それに「単に説明する」（友人 9.8%、仕事関係：4.8%、家族：3.8%）の 3 項目にやや集団間差異が見られた。

考察

まず分類に関しては、先行研究を意識せず、もっぱら回答内容本位で行ったところ、先行研究で用いられたカテゴリーと類似するところと異なるところが現れた。先行研究では、おおまかに、肯定、否定、回避に分けられたものも見受けられたが（横田、1986）、本研究では、肯定、否定、中立に分けた上でさらに細区分を行った。寺尾（1996）は本研究同様細区分をしているが、本研究のカテゴリーで寺尾の分類と一致したのは、否定の「否定・謙遜」、肯定の「礼を言う」、「ほめ返す」それに中立の「単に説明する」の 3 項目であった。また、寺尾の区分にはないカテゴリーも出現した。まず寺尾にはなかった中立という大区分を用いた。肯定的反応の中の肯定的確認（「そう？」と嬉しそうに言うなど）や得意げな反応、中立的反応の中の「普通のことであると言う」と「何も言わない」、否定の「怒る」がそれに当たる。寺尾の大分類とは異なった分類に入ったものもいくつかあった。例えば、寺尾は情報的コメントをその他に分類しているが、本研究では、「肯定的説明」と「単に説明すること」を分け、前者は肯定に、後者は中立に組み入れた。また、「照れる」は寺尾はその他に分類しているが、本研究では肯定的反応に分類した。また、「半信半疑」や「ほめへの疑問」を寺尾は否定と捉えているが、本研究では中立と分類した。このように、回答の内容本位で日本人のほめへの反応を分類すると、英語を対象とした先行研究の分類をそのまま用いたものとはかなり異なった結果となったのである。

さて、日本文化内の副次文化でほめへの返答はどのように異なるのであろうか。世代間を比較すると、30代と60歳以上が際立って他の世代と異なったパターンを示していることがわかる。30代は他のどの世代よりも突出して否定・謙遜の返答をする人と礼を言う人が多かった。同時に、得意げになる人や肯定的説明を加える人が他の世代に比べて特に少ない。60歳以上のグループは肯定的確認が特に多いほか、肯定的説明をする人と何も言わない人、それにほめられたことに半信半疑の返答をする人も平均をかなり上回っていた。この世代は礼

を言うことはほとんどなかった。一般的には10代、20代といった若い世代のスタイルが、他の世代と異なっていると考えられがちであるが、ことほめられたときの返答に関してはこの予測はみごとに覆された。

世代間で興味深い結果が出たので、さらにその理由を探るために別の分析を試みた。その1つは社会人と学生の比較である。調査時点では、返答する人が社会人か学生かというデータは得ていなかったため、暫定的に22歳以下と23歳以上で区別した。その結果は、それほど明確な違いはない、というものであった。違いとしては、否定・謙遜を22歳以下が22.7%、23歳以上が30.4%と、23歳以上のグループの方が多少多く用いていたことと、「単に説明をする」スタイルは22歳以下の世代の方が多く用いていた(9.5%：1.8%)点である。

それでは、対人関係別の比較はどうであろうか。代表的な関係である家族、友人、仕事関係の3グループで比較してみると、明らかに異なるパターンが浮かび上がってきた。家族では否定・謙遜の返答スタイルは他の対人関係に比べて著しく少なく、得意げになったり、肯定的に説明をするケースが大変多いことがわかった。仕事関係の人は、非常に多く(家族間の4.4倍)謙遜・否定の返答を行い、礼を言うことも多かった(家族の5倍)。また、仕事関係の人が得意げになったり、肯定的に説明をしたり、肯定的に確認をすることは、家族に比べると極端に減少する。ほめ言葉に対して「謙遜・否定」したり「礼を言う」ような返答が家族のようなごく親しい間柄では用いられず、仕事関係のような形式ばった関係で多く用いられるということは、これらがフォーマルな関係で用いられるコミュニケーションスタイルであることを実証している。友人関係の場合は、おおむね家族と仕事関係の中間のデータが得られた。ただし、「礼を言う」と「半信半疑」に関しては仕事関係の場合とほとんど同じ程度用いられていた。また、「肯定説明」、「照れる」、「単に説明する」は3つの関係の中では最も多く見受けられた。

30代は仕事関係の対人関係の占める割合が37%と高い。また、40代、50代のうち53%近くを家族が占めている。同様に10代、20代は友人関係のケースが多めである。そのため、それがこれらの世代のパターンを形成した可能性も高い。別の解釈としては、10代、20代と40代、50代はちょうど親子の世代関係にあたり、スタイルが受け継がれているとも考えられる。このことは、60代以上も4、50代同様家族関係が多かったにもかかわらず異なったパターンを示していることから推測できるのである。

世代間の違いについての解釈は今後の研究に委ねるとして、ここでは少なくとも、日本人のほめ言葉への返答スタイルは、対人関係に大きく影響を受けることが明らかになったのである。

次に、男性と女性ではどのような副次文化的差異が見られるであろうか。女性の方が男性よりも多く用いるのは、「否定・謙遜」と「礼を言う」という返答スタイルであった。これに対して男性が女性よりも多く用いるのは「得意げ」な返答であった。また、「照れる」という返答も男性の方が多めである。このように、女性はフォーマルなスタイルを使用する傾向があり、男性は得意げになったり照れたりという情動的スタイルが多めであることがわかった。

まとめ

この研究は、日本人のコミュニケーションスタイルの特質が現れやすいところとして、ほめられたときの返答スタイルに焦点を当て、日本文化内での世代間、性別、対人関係別でどのような違いが見られるかを検討した。その結果、男女間と対人関係間に明確な副次文化的差異が認められた。世代間については、30代と60代に他の世代と異なるスタイルが見られたが、各世代で得られたサンプルに、対人関係の偏りがあったことから、それが世代の違いなのかどうか明言できるまでには至らなかった。ただし、10代、20代の若い世代が、中高年世代と余り大きな違いがないことが示唆されており、文化が確実に受け継がれていることをうかがい知ることができた。

また、先行研究の枠組みにとらわれずに日本人の回答を内容分析すると、先行研究で日本語にも応用されてきた英語の分類法とは少々異なった分類が出現した。今までの分類では見られない項目もいくつか拾い出すことができた。このことは、文化の研究において、当該文化の視点からの研究が必要であることを物語っている。

最後に、日本語のほめ言葉への返答は他の言語のスタイルとはかなり異なることから、日本語や日本文化を学ぶ人々が注目すべき内容であろう。しかしながら、男女差や対人関係による使用法の違いをも含めて学ぶ必要があるであろう。日本語を教える側も同様であろう。日本語では否定・謙遜するものだ、などと一律に思いこんだりすると、状況や人間関係にそぐわない会話となることも多い、ということを示唆している。日本文化では、ほめられたとき25%程度否定したり謙遜し、15%程度「ありがとう」と言ったり「そうなんだ。これはね…」と肯定的に説明する。そればかりでなく、他にもさまざまな返答の仕方がある。このような概括的な知識を得た上で、自分が男性か女性か、相手とはどのような関係かによって言い方が左右されるという文化的特質を認識することも日本文化の学習上大切なのである。

参考文献

- Barnlund, D.C., & Araki, S. (1985). Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16 (1) : 9-26.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (1997). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication* (3rd ed.). New York: McGraw Hill.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's consequences*. Beverly Hills, CA: Sage
- 北出亮 (1993) 「日本人の対人関係とコミュニケーション」日本コミュニケーション学会、橋本満弘、石井敏編『日本人のコミュニケーション』(pp. 23-54)桐原書店
- 寺尾留美 (1996) 「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学 15(5)』:81-88
- 徳井厚子 (2000) 「言語の影響」西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』創元社
- 中根千恵 (1967) 『タテ社会の人間関係』講談社
- 横田淳子 (1986) 「ほめられたときの返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育 58』: 203-216、日本語教育学会

(2000年5月25日 受理)